

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。

学校があつて、友達がついて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための

存在——〈機獣少女きじゆう〉だった。

ツバキに協力し、〈カタストロ〉への対策を始めて三日目の夜、やみひめ達の前に姿を現したのは、学校を連続で欠席していたやみひめの友人・クラウドだった。異様な雰囲気を醸かき立てているクラウドは突如、やみひめに襲いかかる。

その身に纏まとう衣装と武装は、まるで〈機獣少女きじゆう〉のようである——

登場人物

◆流遠るしおやみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂たかちほツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるMBデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

◆橘たちばなアサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

◆クラウド・P・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れた大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

◆神譲かみじょうハン

やみひめとクラウドのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウドとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

硬質な何かが激しくぶつかり合う音が響き、夜の公園の静寂を問答無用でぶち壊していく。立ち回りをするには充分すぎる広場だが、その常人離れた身体能力と武器の破壊力のために、次々に周囲の設備を巻き込んでいく。ベンチが粉碎され、街灯の柱が切断され、鉄製のゴミ箱が吹き飛ばされていく。

そこはすでに憩いいこの場ではなく、戦場の様相を呈していた。

しかし、ここは紛争地域ではない。平和な法治国家だ。戦車も戦闘ヘリも、武装した兵士すらいない。

そこにいるのは——二人の少女。

見た目通りなら、どちらも高校生くらいだろう。容姿は共に美しいが、この国に普通に暮らす少女達となら変わりはない。

変わっている点があるとすれば、彼女等が仮装コスプレのような衣装に身を包んでいる事と、見慣れない武器を持っている事だろう。

黒い和服を着た少女は、白い刀身の機械のような剣を。

黒いドレスを着た少女は、両手に四本の刃が付いた爪のような手甲を。

和服の少女に限って言えば、獣のような毛並みの耳と尻尾が付いているが、特異な格好で武器を振り回している事に比べれば、問題にするまでもないと思える。

華奢きゃしゃな身体からだのどこにそんな力があるのか、少女達は互いの得物を手足のように使いこなし、激しく切り結ぶ。その影響はすさまじく、戦いの余波で周囲のあらゆる物が、次々と破壊されていく。

たった二人の少女達がそれを行っている。

現実感がなさすぎる。

まるでアニメや特撮の光景である。

しかしそれは——現実を起こっている光景だった。



「……………」

二人の少女の戦闘を、離れた場所から見守る者がいた。

見た目は小学校の高学年くらいだろう。セミロングの黒髪を左側でサイドポニーにした少女だ。蒼玉サファイアのような青い瞳で、じつと公園の広場で練り広げられている光景を見つめている。

少女の名前はツバキ・タカチホ。

ここでは『高千穂ツバキ』と名乗っているが、彼女は惑星ゼヘナから、謎の転移現象で地球に来た異邦人である。

そして、目の前で戦っている少女達と同質の存在——〈機獣少女〉でもある。

〈機獣少女〉。

それは本来、惑星ゼヘナに現れる〈カタストロ〉と呼ばれる災厄と戦う存在だ。

かつて惑星ゼヘナの最強兵器として君臨していた『機獣』の力を使い、『MBジャケット』と呼ばれる戦装束に身を包んで戦う——現代の戦乙女達。

しかし今、少女達は互いを敵として相対している。

「どうして、こんな事に……」

目の前の戦いを止めたい。

この二人は知り合いで、きつと親しい間柄に違いない。だったら尚更だ。

しかし、今のツバキにはその術がない。

〈機獣少女〉としての力を使うためには、契約を交わした『MBデバイス』が必要だ。だがそれは、黒い和服を着て戦っている少女——やみひめが使っている。そもそも、この星の大気組成との不適合のために、ツバキは彼女に〈機獣少女〉の代行を頼む事になったので、MBデバイスがあつたところで本来の実力は発揮出来ない。

「何も出来ないで……ッ！」

ただ戦いの行方を見守る事しか出来ない自分の無力さに、ツバキはぎゅっと拳を握りしめた。

第十一話

『機獣少女 VS 機獣少女』

自分の身体が急成長して、そのコントロールを他人にされる状況というのは、イメージ的には気分が良いものじゃないと思う。だけど、実際にそういう状況に置かれている私は、特に嫌悪感のようなものを感じていなかった。

「——ふんッ！」

伸びた手足で身体を思い切り動かすのは、単純に気持ちが良い。それが武器を振るっての戦いだとしても、なぜか気分が高揚してしまっている自分がいる。

実際に動かしているのはカグツチで、今の私はそれを客観的に眺めているだけのはずなのに、不思議と自分でそれを行っているような一体感を感じる。まるで自分の意思で動いて、戦っているみたいな錯覚を覚える。

「はあッ！」

武器である、白い機剣の方の〈カグツチ〉を振るい、くらの手甲の爪を砕く。すると、くらはそれを惜しげもなく捨てると、大きく後方に跳んで距離を取った。

「——オンリコン・ス・トラクチ」

〈機獣少女〉になって聴力が強化されていなければ聞こえないような、咳くような微かな声。くらがその言葉を発すると、捨てたはずの手甲が、壊れる前の状態で握られている。

もう何度目か判らない。壊しても壊しても、くらの手甲は元に戻ってしまう。

それが本当に『元に戻っている』のか、『新しく生成した別のもの』なのかは判らない。

どんなによく見ているでも、壊れる前の手甲が、くらの手に握られる瞬間が見えないから。

カグツチが言うには、視覚的な理由じゃなくて、認識出来ないような仕掛けがあるのかも判らないらしい。

——『ならば、こちらは代わりがなくなるまで壊し続けるだけだ』

最初にその現象を見た際の、カグツチの言葉を思い出す。

(カグツチ、どうするの？ 本当に根比べするつもりじゃないよね？)

私の声帯はカグツチが使っているから、今の私の声は念話の時みたいに、意識内というか、心の中に響くみたいに聞こえる。もう慣れたけど。

「ぬ？ そのつもりだが？」

カグツチの返答は心底、不思議そうだった。

「そう言ったではないか。MBデバイスに二言はないぞ」

……どうしよう。カグツチって意外と脳筋タイプなのかもしれない。戦ってる最中でも、すごく楽しそうというか、活き活きしてるし。

でも、それが機獣の本能なのだとしたら、それはすごく純粋な闘争本能だと思う。カグツチに身体のコントロールは渡してるけど、私の意識はこうしてある。そして、私の身体を通して伝わってくるカグツチの意思は、心地良いものだから。

でもそれって単純に、私自身も好戦的だっただけっていう可能性も……。

「——来るぞ！」

(!?)

カグツチの声で我に返る。くらうが例の踏み込みで、一瞬のうちに数メートルの距離を詰めて肉薄してくる。身体のコントロールはカグツチがしてるけど、私も集中を切らしてはいけないそう。理屈は判らないけど、私も集中していないと、身体のコントロールが鈍るらしい。

余計な事を考えるのはやめて、くらうの動きに集中する。

今の彼女は〈カタストロ〉によって、〈機獣少女〉と同質の存在に変えられている。

くらうが着ているのは、白いラインがアクセントに入った黒いドレス。機械的な意匠を施されたそれは、〈機獣少女〉が身に纏うMBジャケットと同系統の技術で造られている事が判る。

私も〈機獣少女〉だから——判ってしまふ。

「ちいー！」

突進してくる勢いのまま、くらうが繰り出す左右の爪の連撃と、仕上げとばかりに回し蹴りの一撃による怒濤のラッシュが叩きこまれる。

けど、カグツチはそれらをすべて、たった一本の剣で捌ききった。くらうの動きに目が慣れてきたのかもしれない。最初は目では追えても、身体が反応出来なかったけど、動きが先読みが出来るようになれば、対処は可能になる。もともと、それはカグツチが身体をコントロールしているからかもしれないけど。

ともあれ——対処が可能になれば反撃にも移れる。

「——ッ!？」

ずっと無表情だったくらうが、初めて表情を変えた。それは、ほんのわずかな変化だったけど、確かに動揺しているように見えた。

なにせカグツチが機剣を地面に突き立て、くらうの右の手甲を地面に縫い付けるような状態になっていたから。

貫通しているのは手甲部分だけだから、手甲を手放してしまえば解放される。実際、これまでにも壊れた手甲をいくつも投げ捨てている。惜しむようなものじゃないんだと思う。

だけど、咄嗟にその判断をするのは難しい。武器を手放せばいいという簡単な発想が、

切羽詰まった状況だと出てこなかったりする。私もくろうも、熟練の戦士なんかじゃないから。

だけど、カグツチは違う。くろうが縫い付けられた状態の手甲を地面から引きはがそうともがくのに対して、カグツチはあっさりと機剣から手を離し、握り拳で直接——ぶん殴った。

素手喧嘩だ。

くろうのお腹に綺麗なボディーブローを入れて、手甲を手放してしまった身体を宙に浮かし、これまでの意趣返しのように空中で横回転の回し蹴りを叩き込んだ。

(ローリングソバット……)

プロレスで見た事がある。すぐく見た目が派手な技だから、よく覚えてる。

ただ、私のイメージにある変身ヒロインが使う技じゃない。特撮ヒーローだって使わない。なんというか……生々しいし。

「ふむ、決まったな」

結構な距離を蹴り飛ばされて、敷地に植えられた樹木に叩きつけられたくろうを見て、カグツチは満足げに言った。見えないけど、きっとすごく満足げな表情をしてるんだと思う……私の顔で。

(……くろう、大丈夫かな)

「なんだ。せっかく其方の仇を取ってやったというのに」

私の反応に、カグツチは不満げな声を発した。そういえば、カグツチに代わってもらう前、私もあんな風に自販機に叩きつけられたんだっけ。

(そっか……。ありがとう、カグツチ)

「うむ。感謝するがよい」

(でも、やりすぎないですよ？ あの子は私の友達なんだから)

「う、うむ……」

戦闘に夢中で失念していた——そんなカグツチの狼狽するような気配がありありと伝わってくる。戦ってる時のカグツチは少し好戦的な感じだから、今の申し訳なきようにしている態度とのギャップに笑ってしまいそうになる。不貞腐れちゃうだろうから笑わないけど。

樹木に叩きつけられたくろうが気絶してるみたいに動かなくなったから、ちよっとだけ緊張の糸が切れていた。彼女を戦闘不能には出来た。これでひとまずの危機は凌げたと思っていたから。

でも——そこで異変は起きた。

「——オン・ジェ・ネラチ」

注意しないと聞き取れないような音量で、くらうの口から紡つむがれた言葉は、手甲を再生させる時とは違うものだった。

すごく嫌な気配を感じた。私を感じてるんだから、カグツチが感じてないはずがない。すぐさま地面に突き立てられた機剣を抜いて、カグツチが臨戦態勢を取る。

ゆらりと立ち上がると、くらうは自分の身体を抱くように両腕を回し、両膝を地面に着いた。まるで神様に祈りを捧げるシスター修道女みたいに。

その光景には宗教画みたいな神秘性があつて、くらうの背中から羽根が生えてきてもおかしくないと思えた。

そして——羽根は本当に生えた。

ドレスの背中を突き破って生えた黒いそれは、実際にはドレスから生成されている。でも私には、くらうの背中から直接生えてきたようにしか感じられない。

『羽根』と表現したけど、それは鳥とか、神話のドラゴンみたいな有機的なデザインじゃない。もつと機械的な、アニメのロボットに付いてるみたいな、いわゆる飛行装備ウィング・ユニット。

そして——二つの突起物を、私が『羽根』だと感じたのは正しかった。

くらうが立ち上がると、背中の中が上下に展開し、内側に数枚の赤と白の細長い板プレートが見えた。それがどんな機能を持っているかは判らないけど、なんらかの力が発生したのは感じられた。

次の瞬間、くらうの身体が地面からわずかに浮き、その姿が消えた。

「——くっ！」

カグツチが裏拳を繰り出すような動きで、真後ろに機剣を振るつた。それはきつと、本能的な動きだったんだと思う。後ろから迫る殺気に対して、勝手に生存本能が働いただけ。

でも、結果的にそれは正しかった。真後ろに振った機剣を、くらうが手甲でガードしなかったら、私はその爪で串刺しになっていただろうから。

(そんな……どうやって後ろに!?)

動揺する私の声はくらうに聞こえる訳もなく、カグツチも答えられる余裕はなかった。

くらうの姿がまた消える。

咄嗟とっさにカグツチは真後ろを警戒し、次に左右を見回した。

でも、くららの姿はどこにもない。

「上かッ!？」

上空を仰ぎ見ると、何かが光った。その光は、夜空に手持ち花火で文字を書くような不規則な軌道を描くと、こちらに向かってきた——くららだ。

メカニカル
機械的な黒い羽根から生み出される推進力を持って余すように、だけど単純に振り回されている訳でもなくて、まるで慣らし運転でもしているみたいに見える。

真上から迫る相手に対して、カグツチは真つ向からは受けて立たずに、横に跳んでかわした。あの勢いなら、地面に激突して自滅すると思ったんだと思う。

でも、そうはならなかった。

地面に激突する寸前に、くららは姿勢を制御するような挙動をして、直角に軌道を変えた。力づくで無理矢理な動きだけど、くららの羽根はそれを可能にするだけの機能があるらしい。

やむなくカグツチは迎撃態勢を取る。

今までの踏み込みが遅く感じられるような速さで、くららの爪が迫る。

すでに間合いと攻撃のタイミングは掴んでいる。いくら動きが速くなっても、攻撃に移る瞬間を捉えられれば対応出来る。とら

でも、その油断が命取りだった。

「な——」

左肩に熱い感覚。

一呼吸遅れて、カグツチの間の抜けた声が漏れた。

私はいえ、状況に理解が追いつけていなかった。この焼けるような熱さは何だろうと、視線を熱さを感じている場所に向けると、左肩からオレンジ色の光が生えていた。

その光を辿っていくと、それはくららの手甲の爪の間に繋がっていた。

(レーザー・ブレード
近接戦闘用光学兵器……?)

きつとそれは、敵の意表を突くための隠し武器。今までの攻撃はこのための布石で、カグツチが爪の攻撃の感覚を掴んだところで、より有効範囲の長い隠し玉を投入したんだ。確実に勝つために、最高のタイミングを見計らって。

私が冷静に状況を分析出来たのは、ここまでだった。

「——ッ!？」

じわじわと状況に理解が追いついてくると、傷の痛みも認識してしまっ。

肩を高熱の剣で串刺しにされる痛みというものを、どんな表現を用いれば他人に伝えられるのかは自信がないけど、それは今までに感じた事のない痛みで——

「う、ぐ、あ……ぎいああああああああああああああああ——ッ!?」

これが私の声だったのか、カグツチの声だったのか、激痛で混濁した私の意識では判らなかつた。そんな余裕なんてあるはずなかつたし、一刻も早く意識をシャットダウンしないと、痛みで気が狂いそうだったから。

他の事なんて考えられなかつた。

ツバキの事も、くらうの事も。

アサトの事すら。

だって、だって……

——いつそ殺してほしいと願うくらいに痛かつたから。

あとがき

どうも、るとおあき流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第十一話をお届け致します。

……美少女の絶叫シーンを書いた直後なので、若干、テンションが下がっております。僕は絶叫好きなので、『Vガンダム』や『エヴァンゲリオン』などで主人公が悲痛な叫びを上げるシーンが好きなのですが……美少女の絶叫は心が痛みます。いや、少年ならOKとかではなく、ロボットアニメにおける絶望的なシチュエーションに燃えるというだけなんです。念のため。

さて、今回は短いですが、戦闘シーンがメインになると、このくらいが限界なのかも思っています。別の場所で他のドラマが同時展開すれば別ですが、やみ子とクラウの戦闘だけなので、書き手と読者が楽しいのはこの辺りまでかと。実際、僕はこれ以上バトルを書くのはしんどいです。

良きところで謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。ありがとうございます。それから、娘さんをいじめて申し訳ありません。悪いのはカグツチです。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

今回はサイドストーリーですが、ほぼ本編扱いで、ぶっちゃけ続きます。今回が短かった分、月末には掲載するつもりですので、お待ちいただけると幸いです。

美少女の悲痛な叫びは、あかん……。

2015/9/7 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る